



第一回アジア統計家会議に列席して【1】

行政管理庁 統計基準部長 美濃部亮吉

4月8日から17日まで、タイの首都バンコックで、第1回アジア統計家会議が開かれた。会場は、普通エカフエと呼ばれているアジア・極東経済委員会のビルディングのなかの小会議室であつた。色々の国際機関のアジア支部は、ほとんどすべてバンコックにおかれている。エカフエは、国連のアジア支部だといつてもよいだろう。このほか、F・A・O（食糧・農業機構）、W・H・O（厚生・衛生機構）、ユネスコ等のアジア支部もバンコックにある。例のシアトー（SFATO）の本部もバンコックにある。タイはアジアのスイスであり、バンコックはアジアのジュネーブだといつていいかも知れない。

会議の開かれたエカフエのビルディングは、タイ国がエカフエのために建てたものだそうである。なかなか立派である。小会議室の冷房も非常によくきいていて、そとは100度に近い殺人的猛暑であるにかかわらず、室のなかは60度に近く、気持ちよく会議を進めることができた。ただ、会議室から出る度ごとに、トルコ風呂に飛びこんだような気持ちになるには閉口した。

さきに、「4月8日から、第1回アジア統計家会議が開かれた」と書いたが、それは正確にいうと正しい表現ではない。というのは、会議は第5回地域統計家会議として初められ、開会壁頭にアジア統計家会議にきりかえられたからである。地域統計家会議は今までに4回開かれた。第1回は、貿易統計に使われる商品分類を、第2回は工業センサスを、第3回は国民所得を、第4回は人口センサスを議題として開かれた。地域統計家会議は、このように、統計上の何かの問題について、エカフエに加盟している国々の意見をまとめる必要が生じた時、その都度エカフエの事務局が中心となつて招集されたのである。アジア統計家会議はこれと異り、永続的なまた、連続的な組織として設けられた。即ち、問題が起つた都度開かれるのではなくて、あらかじめ運営に関する規定をきめておいて、定期的に会合を開こうというわけである。又、討議する議題についても、問題が起つた時討議するのではなくて、あらかじめ討議すべきテーマをきめておき、それを順次に系統的に検討してゆくことになる。更に、検討すべきテーマがきめられるから、そのテーマについて、会議に提出する色々の資料をととのえなければならぬ。そのためには、アジア統計家会議直属の事務

局を設けなければならない。このようにアジア統計家会議の性格が永続的な連続的な会議であるという所から今までの地域統計家会議とは色々な点でちがつて来る。こういうわけで地域統計家会議の運営は、一切エカフエの事務局にまかされていた。ところが、アジア統計家会議は永続的・連続的であると同時に、エカフエの会議でないのだから、エカフエの事務局が色々の事務を手つたつてくれるにしてもそれ自身独自の運営に関する規定をもたなければならないわけである。今度の会議の議事日程には、アジア統計家会議の運営に関する規定をきめることが含まれていた。

4月8日午前10時にタイの外務大臣の臨席のもとに会議が初められた。出席したのは、エカフエの加盟国であるオーストラリア、カンボジア、セイロン、台湾、フランス、インド、インドネシア、日本、ラオス、パキスタン、フィリピン、タイ、アメリカ、ソ連、ウエトナム準会員であるマレー、それに世界労働組合連合（WETV）、エカフエ、国連統計部、食糧・農業機構（F.A.O）の代表者達が加つた。食糧・農業機構のセンサス課長スミット氏が出席したのは、この会議の主要議題が「1960年農業センサス」であつたからである。まづ、1人の議長及び2人の副議長の選挙が行われた。議長には、慣例に従つて地元の統計局長であるアティボルン・クセムスリー氏が選任された。この人はタイのプリンスだということである。第1副議長には、日本の美濃部が、第2副議長にはインドのシンハー氏（インド統計協会サンプル部長）が選任された。本会議の副議長は、ただ名前だけで実質的には何もしないでもよい。しかし、名前だけではあつても、日本が第1副議長に選ばれたことは、日本の統計の水準がエカフエ地域のなかでは一番高いということが公認されたことを意味するわけで、当然のことではあるけれども、うれしい気持ちがあつた。

開会壁頭、地域統計家会議をアジア統計家会議に切りかえることが提案され、満場一致異議なく可決された。ソ連から、中共をメンバーに入れろという提案がなされるのではないかと思つてしたが、そういう提案もなく、アジア統計家会議は、エカフエの加盟国、準加盟国によつて構成されることにきめられた。

（次号へ続く）